



2010年 夏の経済教育セミナー 報告

■8月11日(水) 大阪 中学教員対象

蒸し暑い大阪。会場は、日銀の後ろにあり交通は便利。参加者 83 名。会場がいっぱいになる。

第1講義 篠原代表担当「中学教科書で教える経済の仕組み」

札幌会場と同一内容。

第2講義 野間先生担当「中学教科書で教える社会保障のしくみ」

今回はじめての内容。

まず前提としての経済の仕組み、市場と政府の関係を説明。

次に社会保障の必要性を説明。リスクの対処法を生徒に挙げさせ、その対処法を分類させてみるなどの導入が可能ではという提言がされる。

社会保障はリスク対応。個人では貯蓄、保険がある。しかし、それだけでは限界があるために政府が登場する事を確認した上で、社会保障制度全般の枠組みを説明。そのときに、社会保険（保険料を支払う）とそれ以外（政府の全面保証）との違いを明確にする必要ありとの指摘がされる。

だれが、どれだけ負担しているか。そもそも論は、1999年厚生白書、データは2008年厚生労働白書がよいとアドバイス。

次いで、医療保障の説明に入る。なかでも国民健保の構造が、高齢者が多く、所得が低く、負担が多いという特徴をもち一番問題と指摘。保険料は、従業員負担でも企業負担でも結果は同じであると説明。

さらに、年金制度の説明。積み立て方式と賦課方式の違いを確認。

今後の改革の方向について触れる。税方式の移行には、経済学者の支持が多い。その場合消費税は12%という提案などがされている。

質疑では、若者が年金に参加していない現状をどうすべきか、日本の保険料負担の特徴はどうか、年金に関しては問題が分かったのはいつで、なぜここまで悪化したのか、などの質問がでた。

それに対しては、将来必ず困るから今出しておいたほうがよいと説得すべき、だれが負担しても結局同じであるので、だれがというのは政治的問題である、20年以上前からこうなることは分かっていた。あとは政治の問題だとの指摘がなされた。

ホットなテーマを、教科書とデータに即して整理し、経済学的な知見を加えた明快な講義であった。

第3講義 ブルサ

各会場と同じ。一組名チームもあり、全17組にわかれ、熱心、興味深そうに参加。

第4講義 グループディスカッション

参加者を5グループに分け、実践報告の交流と質疑などを行った。



アドバイザーに、信州大学栗原先生、大阪奥田先生、篠原先生、野間先生、新井が加わり、熱心な交流が行われた。

金融教育推進校を引き受けた先生、ハンバーガーショップを導入に、全部をそれで通した実践を行った先生、お金をテーマに選択授業を試みた先生、失業率に合わせた椅子取りゲームを行った先生、歴史でも経済の観点を取り入れることができるという提言などの実践が紹介。新指導要領で選択社会がなくなったあとの増加分 15 時間をいかに活用するかがこれからの課題ということを確認。しくみを考えさせる中で、生きる力、たくましく生きる生徒を育てたいとの共通理解を行った。

文責：新井 明

■ 8月12日(木) 大阪 高校教員対象

やや気温は下がったが、前夜からの雨が残り蒸し暑い日。

高校対象の日。参加 72 名で、これもかなり会場はいっぱいになる。

第1講義 篠原先生担当「大学入試問題解説」

篠原先生がこのテーマで講義をするのは、はじめて。

まず教科書の問題を指摘、入試問題との囚人のディレンマ状況と位置づける。しかし、教師自身も問題であり、本当はトリレンマではないかとも指摘。

その上で、青山学院の問題と國學院大學の問題をとりあげ、その理論的背景を説明。

青山学院大学の問題は、余剰分析であり、余剰の考え方をグラフをつかって丁寧に説明。

また、曲線のシフトの考え方を物品税（間接税）の事例で説明。青山学院の問題は、面白いがそこから何を考えさせるかを加えるともっと役立つ可能性はある。ただし、余剰分析を高校で教えることが必要かどうかは疑問と解説をされる。

國學院大學の問題は、かなり上質。関税や補助金の意味をこれでしっかり理解することができる。ここから学ぶことができる問題といえる。

同じ質の問題が 2010 の青山学院経営学部の問題にある。前半はだめだが、後半の食糧管理制度を D、S のグラフを使って考えさせる問題は良い。ただし、D、S に関しては、ここまで学ばせるなら意味があるが、そうでないなら止めたほうがよいというのが私の見解である。

最後に、国際経済の教科書の記述の問題点を指摘して終了した。

第2講義 榎原宏司氏担当「高校教科書で教える金融・証券のしくみ」

名古屋、札幌と同じ。



第3講義 大竹文雄先生担当「高校教科書で教える市場経済の考え方」

大竹先生は三年連続講師として講義をされる。

まず、教科書はたくさん書かれているが、経済学の基本的な考え方を丁寧に書いていないので理解しにくいと指摘。

市場を考えるには、まず市場競争が効率的な理由を納得させる必要がある。その例としてプロ野球選手の数と規制のモデルを使って説明される。

事前の質問に答えながら説明を続ける。

需要曲線と供給曲線では、なぜ供給曲線が右上がりかを三つのケースに分けて説明。それとともに、薄利多売などのよくある疑問にも答える。

次に需要曲線がなぜ右下がりか、シフトとは何かを説明。

そのうえで、独占はなぜ効率性を妨げるかを説明、供給独占のケース、労働市場での買い手独占のケースにわけで説明。

最低賃金の問題や市場の失敗のケースを説明し、最後に、市場の失敗と政府の失敗のどちらが重要かを解説した。これは、どちらも重要だが、市場の失敗は限られているのに対して、政府は競争がないだけ、常に非効率性が発生することに気づいておきたいとまとめられた。

第4講義 グループディスカッション

途中帰宅の先生を除き、約 50 名を、3 グループに分けて実施。それぞれに、経済学の専門家である野間、西村、篠原の各先生にアドバイザーをお願いして、実践報告、質疑を行った。

参加者は、中学の教員、高校の教員、教科書会社の関係者など多彩であった。

議論では、大学入試の制度改革とカリキュラム、高校の現場での実践との関わり、ストーリー性のない教科書の記述改善の要望、中学教員から高校教員への要望、理論よりも生きた知恵が必要な生徒たちに教える方法や教材などに関する情報交換がなされた。

また、年金や保険などの講義に関する質問なども寄せられ、それに答えるなど、有意義なディスカッションとなった。

文責：新井 明